

Doctors' Attention

ドクターズアテンション

に掲載されました

「ドクターズアテンション」は京阪神の病院を中心とする医療機関の関係者を対象に医療現場の現状や課題の解決、医療文化の創造を目指し1980年に発刊。本年で29年を迎えた、月刊医療専門紙です。

近年では、理事長、病院長、医局のドクターに加えて、現場の声を紙面に反映すべく看護師部長、事務局長、薬剤師部長、管理栄養士への取材を実施し、様々な論点で価値ある情報を掲載。病院関係者とその周辺の診療所との病診連携強化を図っています。

- 京阪神間、医療機関のための情報を毎月ダイレクトにお届け
- 人間力に基づくクライアント(患者)のための情報



(左から) 馬殿 徹也、馬殿 芳郎、馬殿 正人

地域医療を支えて60年 宝塚市の拠点病院として

が分かります。今は、まず一度実際の状況をまとめて、傾向を読もうという段階です。傾向を読んだ上で、実際執行している分と比較しながら2018年には都道府県主導の医療計画及び地域医療構想(ビジョン)が運用開始になる予定です。

また、来年の介護保険改定のガイドラインが先日発表されましたが、定期巡回型や認知症患者さんに対しての短時間の頻回立寄りといったことについて弾力的に対応し、在宅介護を進めて行こうという方針が謳われています。とはいえ介護だけでは点数が低いので、医療を含めてトータルで見ていかないとビジネスとして成り立つかは疑問です。

家で死ぬが、病院で死ぬか 日本人の死生観も変化する

看取りを突き詰めて考えていくと、死生観につながります。統計的に家で亡くなる方より、病院で亡くなる方が多くなったのは昭和30年頃のことです。国民皆保険制度が整った頃が分岐点です。それまでは大家族で、お家で亡くなることが多かった中で、「死」に対してこういうものだという各人における漠然とした認識がありました。しかし病院で亡くなるようになってくると、減り、死に対してたじろぐことが多くなってきました。そのために、死亡確認で済むところを救急病院で蘇生処置を行うようなケースが増えています。こういったことで、全体的な医療費

が増えている面もあります。皆で考えなくてはいけない問題です。
例えば、自分の意志が発揮できない、自分らしく生きている状態ではなく、なったら、胃ろうもしないというのがフランス人の考え方です。もちろん世界で出来ているから日本でも出来るというのではありません。国によって宗教観も大きく違いますからカスタマイズが必要で、延命するなら生きていて良かったと思えるものでなくてはいいないと思います。今、「終活」が流行っていますが、家族の考えで本人の意思が飛んでしまうこともあります。時代と共に考え方が大きく変わっていく可能性もあります。

点数が改定で上がったがったと言っているうちは幸せかもしれません。もし1点10円の固定相場が変動相場などになったら大変です。日本の国民皆保険は世界でも注目・評価されていますから、何とか潰さないように国民皆で考えていかなくてはなりません。

地域医療には不可欠の 病院と開業医の緊密な連携

厚労省はあれこれ言いますが本来味方です。本気で喧嘩しても負けません。癒着とかごり押しではなく、きちんと国民のためにしっかりと話をし、摺り合わせをしていかななくてはなりません。今や勤務医が7割、開業医が3割です。地域医療においては病院と診療所がお互いの顔を知っていることが大切です。紹介状の行き来だけでは人となりは分かりません。電話一本で済

医療法人回生会 宝塚病院
理事長 馬殿 芳郎(外科)
院長 馬殿 正人(循環器科)
副院長 馬殿 徹也(外科)

むかどうか大事なこと。地域医療包括ケア、病診連携を進めるにあたって大事なことは、最終的には顔や人となりを知っているかどうかだと、地域医療の権威、神戸大学の緩和と治療科の本澤義之教授もおっしゃっていました。飲み会が一番だそう。宝塚市では、7つの病院と訪問看護、介護、開業医の先生が一堂に集まり、病院がどんなことを考えているか伝える会を開いています。病院側から病院の特徴や、紹介時にはどんな手続きが必要か、患者さんを返す時にはどうしたらいいか、そしてそれらを個別に具体的なところまで話し合えるような場を持つていきたいと考えています。約2年、このような話し合いの場を持ち、徐々に形になりつつあります。既に往診して在宅をしっかりと診ている先生もいれば、不慣れなので怖いという先生もいらつやいます。年齢も違い、温度差もあります。そろそろ代替わりの時期でもあり、若い先生には在宅も思いますが、考えている方が多いように思います。往診に対する政策誘導と開業医の先生方の意識の改革もあるので、今後10年でかなり変わるのではないのでしょうか。実際、介護の連絡会議などにも点数が付くような仕組みになりました。宝塚は宝塚の方式を作っているわけではないと宝塚市の医師会長ともお話ししています。お互いにかすがいのような存在になれるといいと思っています。
自分の命は自分でどうするのか決めましよう。そして、生きて来て良かったと思える人生を送りたいと考えます。